二八七五番
天地に　少し至らぬ　ますらをと　思ひし我や
男心もなき

二八七六番
里近く　家や居るべき　この我が目の　人目をし
つつ　恋の繁けく

二八七七番
何時はなも　恋ひずありとは　あらねども　うた
てこのころ　恋し繁しも

二八七八番
ぬばたまの　寝ねてし夕の　物思に　裂けにし胸
は　止む時もなし